



学問のすゝめ

福澤諭吉著

岩波書店 1942 (岩波文庫)

所蔵館 請求記号

本館：X/080/I95B

神田分館：X/080/I95B

学問のすすめ：現代語訳

福澤諭吉著 齋藤孝訳

筑摩書房 2009 (ちくま新書)

所蔵館 請求記号

生田分館：X/081/C44/766

神田分館：/370/F85



[著者プロフィール]

福澤諭吉 (ふくざわ ゆきち)

[1835~1901]

啓蒙思想家・教育家

大坂で蘭学を緒方洪庵に学び

江戸に蘭学塾 (のちの慶応義塾) を開設

大柳 康司 (経営学部教授)

福澤諭吉といえば、1万円札の肖像となっており、その顔を知らない人はいないのではないかと。

財務省のHPに採用理由として「一般的にも、国際的にも、知名度が高い明治以降の文化人の中から採用」したとしか書かれていない。これは理由になっているのだろうかと私自身思う次第である。ただ、この『学問のすゝめ』という本を読めば、採用された理由を少し感じることができる。

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」といへり」という有名な冒頭から始まる『学問のすゝめ』は、1872年2月から1876年11月までの約5年間にわたり出版された17冊の小冊子を1880年にまとめて出版したものである。

小泉信三の言葉を借りると、「偶然の機会に起草されたもの」で、何かを目的に計画を立てて書かれた書籍ではない。それゆえ全17編の内容は多岐にわたる。また17編をそれぞれつまみ食いのような読み方ができるといっても、この本の特徴であろう。

福澤の主張は、「人は平等である」ということで

はなく、人は学問をするかしないかによって大きな差が生じるということである。「学問に精を出し、独立し、責任をもち、税金を払え」とも言っている。福澤諭吉がいう学問とは、「実学」、つまり実のある学問である。具体的には読み書き、簿記など商売に必要なものにくわえ、地理学や物理学や経済学などの専門知識などが、これにあたる。このような主張を明治初期にするのだから、世の中の多くの人は非常におどろいたことであろう。

最後に、福澤諭吉らしい一文を紹介する。『学問のすゝめ』の冒頭の「合本学問之観序」に、この本がいかにか売れたかが書かれている。「全17編で約70万冊が売れ、そのうち初編は20万冊をくだらない。不正コピーされた本もあるだろうから、これを含めて、かりに22万冊売れたとすると、日本の人口が3500万人とすれば、国民160人に一人が読んだといえる」という記載がある。今こんなことを本の冒頭で書ける著者はいるだろうか。この冒頭を見るだけで、福澤諭吉がいかにかすごい人物であったか、垣間見えるのではないだろうか。